

俘囚

海野十三

青空文庫

「ねエ、すこし外へ出てみない！」

「うん。——」

あたしたちは、すこし飲みすぎたようだ。ステップが踵ようよろ々と崩くずれて、ちつとも鮮あざやかに極きまらない。松まつなが永の肩に首を載のせている——というよりも、彼の逞たくましい頸くびに両手を廻めぐして、シツカリ抱きついているのだった。火のように熱い自分の息が、彼の真赤な耳みみたぼ朶ぼにぶつかっては、逆にあたしの頬を叩く。

ヒヤリとした空気が、襟えりくび首のあたりに触ふれた。気がついてみると、もう屋上に出ている。あたりは真暗まっくら。——唯ただ、足の下がキラキラ光っている。水が打つてあるらしい。

「さあ、ベンチだよ。お掛け……」

彼は、ぐにやりとしているあたしの身体を、ベンチの背中に凭もたせかけた。ああ、冷い木の床ゆか。いい気持だ。あたしは頭をガクンとうしろに垂たれた。なにやら足りないものが感ぜられる。あたしは口をパクパクと開あけてみせた。

「なんだネ」と彼が云った。変な角度からその声が聞えた。

「逃げちやいやーよ。……タバコ！」

「あ、タバコかい」

親切な彼は、火の点いた新しいやつを、あたしの唇の間に挟んでくれた。吸っては、吸う。美味しい。ほんとに、美味しい。

「おい、大丈夫かい」松永はいつの間にか、あたしの傍にピッタリと身体をつけていた。

「大丈夫よ才。これツくらい……」

「もう十一時に間もないよ。今夜は早く帰った方がいいんだがなア、奥さん」

「よしてよ！」あたしは呶鳴りつけてやった。「莫迦にしているわ、奥さんなんて」

「いくら冷血の博士だつて、こう毎晩続けて奥さんが遅くつちや、きつと感づくよ」

「もう感づいているわよ才、感づいちや悪い？」

「勿論、よかないよ。しかし僕は懼れるとは云やしない」

「へん、どうだか。——懼れていますって声よ」

「とにかく、博士を怒らせることはよくないと思うよ。事を荒立てちや損だ。平和工作を

十分にして置いて、その下で吾々は楽しい時間を送りたいんだ。今夜あたり早く帰って、

博士の首玉に君のその白い腕を捲きつけるといいんだがナ」

彼の云っている言葉の中には、確かにあたしの夫への恐怖が窺われる。青年松永は子供

だ。そして、偶像崇拜家だ。あたしの夫が、博士であり、そして十何年もこの方、研究室に閉じ籠って研究ばかりしているところ、一方ならぬ圧力を感じているのだ。博士がなんだい。あたしから見れば、夫なんて紙人形に等しいお馬鹿さんだ。お馬鹿さんでなければ、あんなに昼となく夜となく、研究室で屍体ばかりをいじって暮せるものではない。その癖、この三四年こつち、夫は私の肉体に指一本触った事がないのだ。

あたしは、前から持っていた心配を、此処にまた苦く思い出さねばならなかった。

(この調子で行くと、この青年は屹度、私から離れてゆこうとするに違いない！)

きつと離れてゆくだろう。ああ、それこそ大変だ。そうなつては、あたしは生きてゆく力を失つてしまうだろう。松永無くして、私の生活がなんの一日だつてあるものか。——こうなつては、最後の切り札を投げるより外に途がない。おお、その最後の切り札！

「ねえ。——」とあたしは彼の身体をひっぱった。「ちよいと耳をお貸しよ」

「?」

「あたしがこれから云うことを聴いて、大きな声を出しちやいやアよ」

彼は怪訝な顔をして、あたしの方に耳をさしだした。

「いいこと!——」グツと声を落として、彼の耳の穴に吹きこんだ。「あんたのために、

あたし、今夜うちの人を殺してしまおうよ！」

「えッ？」

これを聴いた松永は、あたしの腕の中に、ピーンと四肢を強直させた。なんて意気地なしなんだろう、二十七にもなっている癖に……。

邸内は、底知れぬ闇の中に沈んでいた。

(お誂え向きだわ!) 今宵は夜もすがら月が無い。

トントんと、長い廊下の上に、あたしの蹙音がイヤに高く響く。薄ぐらい廊下灯が、蜘蛛の巣だらけの天井に、ポツツリ点いている。その角を直角に右に曲る。——プーんと、きつい薬剤の匂いが流れて来た。夫の実験室は、もうすぐ其所だ。

夫の部屋の前に立って、あたしは、コツコツと扉を叩いた。——返事はない。

無くても構わない。ハンドルをぎゅつと廻すと、扉は苦もなく開いた。夫は、あたしの訪問することなどを、全然予期していないのだ。だから扉々には、鍵もなにも掛っていない。あたしは、アルコール漬の標本壇の並ぶ棚の間をすりぬけて、ズンズン奥へ入っていった。

一番奥の解剖室かいぼうしつの中で、ガチャリと金属の器具が触れ合う物音がした。ああ、解剖室！それは、あたしの一番苦手にがての部屋であつたけれど……。

扉ドアを開けてみると、一段と低くなつた解剖室の土間に、果して夫の姿を見出した。

解剖台の上に、半身を前屈まえかがみにして、屍体をいじりまわしていた夫は、ハツと面おもてをあげた。白い手術帽と、大きいマスクの間から、ギョロとした眼だけが見える。困惑こんわくの目の色がだんだんと憤怒ふんぬの光を帯びてきた。だが、今夜はそんなことで駭おどろくようなあたしじやない。

「裏庭で、変な呻うなり声がしますのよ。そしてなんだかチカチカ光り物が見えますわ。気味が悪くて、寝られませんの。ちよつと見て下さらない」

「う、うーッ」と夫は獣けもののように呻つた。「くッ、下らないことを云うな。そんなことア無い」

「いえ本当でございますよ。あれは屹度きつと、あの空井戸からいどからでございますわ。あなたがお悪いですわ。由緒ゆいしよある井戸をあんな風にお使いになつたりして……」

空井戸くすぼねというのは、奥庭にある。古い由緒も、非常識な夫の手にかかつては、解剖のあの肩骨くすぼねなどを抛なげこんで置く地中の屑箱くずばねにしか過ぎなかつた。底はウンと深かつたの

で、ちよつとやそつと屑を抛げこんでも、一向に底が浮き上つてこなかつた。

「だツ黙れ。……明日になつたら、見てやる」

「明日では困ります。只今、ちよつとお探りなすつて下さいませんか。さもないと、あなたくはこれから警察に参り、あの井戸まで出張して頂くようにお願いいたしますわ」

「待ちなさい」と夫の声が慄えた。「見てやらないとは云わない。……さあ、案内しろ」

夫は腹立たしげに、メスを解剖台の上へ抛りだした。屍体の上には、さも大事そうに、防水布をスポリと被せて、始めて台の傍を離れた。

夫は棚から太い懐中電灯を取つて、スタスタと出ていった。あたしは十歩ほど離れて、後に随つた。夫の手術着の肩のあたりは、醜く角張つて、なんとも云えないうそ寒い後姿だつた。歩むたびに、ヒヨコンヒヨコンと、なにかに引懸かるような足つきが、まるで人造人間の歩いているところと変らない。

あたしは夫の醜軀を、背後からドンと突き飛ばしたい衝動にさえ駆られた。そのときの異様な感じは、それから後、しばしばあたしの胸に蘇つてきて、そのたびに気持が悪くなつた。だが何故それが気持を悪くさせるのかについて、そのときはまだハッキリ知らなかつたのである。後になつて、その謎が一瞬間に解けたとき、あたしは言語に絶する驚

愕がくと悲嘆とに暮れなければならなかった。訳はおいおい判つてくるだろうから、此処ここには云わない。

森閑しんかんとした裏庭に下りると、夫は懐中電灯をパツと点じた。その光りが、庭石や生えのびた草叢くさむらを白く照して、まるで風景写真の陰画いんがを透すかしてみたときのようなだった。あたしたちは無言のまま、雑草を掻かき分けて進んだ。

「何にも居ないじゃないか」と夫は低く呟つぶやいた。

「居ないことはございませぬわ。あの井戸の辺でございますよ」

「居ないものは居ない。お前の臆病から起つた錯覚さくかくだ！ どこに光っている。どこに呻うめっている。……」

「呀あッ！ あなた、変でございますよ」

「ナニ？」

「ごらん遊ばせ。井戸の蓋ふたが……」

「井戸の蓋？ おお、井戸の蓋が開いている。どツどうしたんだらう」

井戸の蓋というのは、重い鉄蓋だった。直径が一メートル強きょうもあって、非常に重かった。そしてその上には、楕円形だえんけいの穴が明いていた。十五糶センチに二十糶だから、円に近い。

夫は秘密の井戸の方へ、ソロリソロリと歩みよつた。判らぬように、ソツと内部を覗いてみるつもりだろう。腰が半分以上も、浮きたつた。夫の注意力は、すっかり穴の中に注がれている。すぐ後にいるあたしにも気がつかない。機会！

「ええいッ！」

ドーンと夫の腰をついた。不意を喰らつて、

「なツ何をする、魚子！」

と、夫は始めてあたしの害心に気がついた。しかし、そういう叫び声の終るか終らないうちに、彼の姿は地上から消えた。深い空井戸の中に転落していったのだ。懐中電灯だけが彼の手を離れ、もんどり打って草叢に顎をぶつつけた。

(やつつけた！)と、あたしは俄かに頭がハッキリするのを覚えた。(だが、それで安心出来るだろうか)

「とうとう、やつたネ」

別な声が、背後から近づいた。松永の声だと判っていたが、ギクンとした。

「ちよつと手を貸してよ」

あたしは、拾ってきた懐中電灯で、足許に転がっている沢庵石の倍ほどもある大き

な石を照した。

「どうするのさ」

「こつちへ転がして……」とゴロリと動かして、「ああ、もういいわよ」——あとは独りでやった。

「ウーンと、しょー!」

「奥さん、それはお止しなさい」と彼は慌てて停めたけれど、

「ウーンと、しょー!」

大きな石は、ゴロゴロ転がりだした。そして勢い凄じく、井戸の中に落ちていった。夫への最後の贈物だ。——ちよつと間を置いて、何とも名状できないような叫喚が、地の底から響いてきた。

松永は、あたしの傍にガタガタ慄えていた。

「さア、もう一度ウインチを使って、蓋をして頂戴よオ」

ギチギチとウインチの鎖が軋んで、井戸の上には、元のように、重い鉄蓋が載せられた。「ちよつとその孔から、下を覗いて見てくれない」

鉄蓋の上には楕円形の覗き穴が明いていた。縦が二十センチ横が十五センチほどの穴

である。

「飛んでもない……」

松永は駭おどろいて尻しりこ込みをした。

夜の闇が、このまま何時いつまでも、続いているとよかった。この柔しとねい褥ねの上に、彼と二人だけの世界が、世間の眼から永遠に置き忘れているとよかった。しかし用よう捨しゃなく、白い暁がカーテンを通して入ってきた。

「じゃ、ちよつと行つて来るからネ」

松永は、実直な銀行員だった。永遠の幸福を思えば、彼を素直に勤め先へ離してやるより外はない。

「じゃ、いつてらつしやい。夕方には、早く帰つてくるのよ」

彼は膨はれぼつたい眼を気にしながら出ていった。

使用人の居ないこの広い邸宅は、まるで化物屋敷のように、静まりかえっていた。一週に一度は、派出婦がやって来て、食料品を補おぎなつたり、洗せんい物を受けとつたりして行くのが例だった。いつまで寝ていようと、もう氣儘きまま一杯にできる身の上になった。呼びつけては、氣短どなかに用事を怒鳴りつける夫も居なくなつた。だからいつまでもベッドの上に睡つてい

ればよかつたのであるが、どういふものか落付いて寝ていられなかつた。

あたしは、ちぐはぐな気持で、とうとうベッドから起き出でた。着物を着かえて鏡に向つた。蒼白い顔、血走つた眼、カサカサに乾いた唇――

（お前は、夫殺しをした！）

あたしは、云わでもの言葉を、鏡の中の顔に投げつけた。おお、殺人者！　あたしは取返しのつかない事をしてしまったのだ。窓の向うに見える井戸の中に、夫の肉体は崩れてゆくだろう。彼にはもう二度と、この土の上に立ち上る力は無くなつてしまつたのだ。鉛筆の芯が折れたように、彼の生活はプツリと切断してしまつたのだ。彼の研究も、かれの家族も（あたし独りがその家族だつた）それから彼の財産も、すべて夫の手を離れてしまつた。彼は今日まで、すっかり無駄働きをしたようなものだ。そんなことをさせたのは、一体誰の罪だ。殺したのは、あたしだ。しかし殺させるように導いたのは夫自身だつたじやないか。他の男のところへ嫁いでいれば、人殺しなどをせずに済んだにちがいない。あたしの不運が人殺しをさせたのだ。といつて人殺しをしたのは此の手である。この鏡に写つている女である。もう拭つても拭い切れない。あたしの肉体には、夫殺しの文字が大きな痣になつてゐるのに違ひない。誰がそれを見付けないでゐるものか。じわりじわりと司

直ちよくの手が、あたしの膚はだに迫おってくるのが感じられる。

（ああ、こんな厭いやな氣持になるのだったら、夫を殺すのではなかった！）

押しよせてくる不安に、あたしはもう堪たえられなくなった。なにか救すくいの手を伸のべてくれるものは無いか。

「そうだ、有る有る。お金だ。夫の残していった金だ。それを探そう！」

いつか夫が、莫ばくだい大な紙幣さつの札を数えているところへ、入っていったことがあった。あれは五年ほど前のことだったが、研究に使ったとしても、まだ相当残っている筈はず。それを見つけて、あとはしたいことを今夜からでもするのだ。

あたしは、それから夕方までを、故なき夫の隠いんとく匿とくしている財産探しに費ついやした。茶の間から始はまつて、寢室から、書齋の本箱、机ひきだしの抽斗ひきだしそれから洋服ようふく筆筒びつづの中まで、すっかり調べてみた。その結果は、云うまでもなく大失敗だった。あれほど有ると思つた金が、五十円まともと纏まとつていかなかった。この上は、夫の解剖室に入つて屍体ふくこうの腹腔ふくこうまでを調べてみなければならなかったが、あの部屋だけは全く手を出す勇氣がない。しかしそれほどまでにせずとも、これ以上探しても無駄であることが判つた。それは数冊の貯金帖を発見したことだったが、その帖面の現在高は、云いあわせたように、いずれも一円以下の小額だった。

結局わが夫の懐工合は、非常に悪いことが判った。意外ではあるが、事実だから仕方がない。

失望のあまり、今度はブーツとした。この上は、化物屋敷と広い土地とを手離すより外に途がない。松永が来たならば、適当のときに、それを相談しようと思った。彼はもう間もなく訪れて来るに違いない。あたしはまた鏡に向つて、髪かたちを整えた。

だが、調子の悪いときには、悪いことが無制限に続くものである。というのは、松永はいつまで待つても訪ねてこなかった。もう三十分、もう一時間と待っているうちに、とうとう何時の間にやら、十二時の時計が鳴りひびいた。そして日附が一つ新しくなった。

(やっぱり、そうだ！——松永はあたしのところから、永遠に遁^にげてしまったのだ！)

彼のために、思い切つてやった仕事か、あの子供っぽい青年の胸に、恐怖を植えたのに違いない。人殺しの押かけ女房の許から逃げだしたのだ。もう会えないかも知れない、あの可愛い男に……。

悶^{もだ}えに満ちた夜は、やがて明け放たれた。憎らしいほどの上天気だった。だが、内に閉じ籠^{こも}っているあたしの気持は、腹立たしくなるばかりだった。幾回となく発作^{ほっさ}が起つて、あたしは獣^{けもの}のように叫びながら、灰色に汚れた壁に、われとわが身体をうちつけた。あま

りの孤独、消しきれない罪悪、迫りくる恐怖戦慄、——その苦悶のために気が変になりそうだ、恐ろしかった。あの重い鉄蓋が持ち上がるものだったら、あたしは殺した夫の跡を追つて、井戸の中に飛びこんだかも知れない。

喚き、悶え、暴れているうちに、とうとう身体の方が疲れ切つて、あたしはベッドの上に身を投げだした。睡つたことは睡つたが、恐ろしい夢を、幾度となく次から次へと見た。——不図、その白昼夢から、パツタリ目醒めた。オヤオヤ睡つたようだと、気がついたとき、庭の方の硝子窓が、コツコツと叩かれるので、其の方へ顔を向けた。

「ああ、——」あたしは、思わず大声をあげると、その場に飛んで起きた。なぜなら、庭に向いた窓の向うから、しきりに此方を覗きこんでいる者があつた。その円い顔——紛れもなく、逃げたとばかり思っていた松永の笑顔だった。

「マーさん、お這入り——」

「どうして昨夜は来なかつたのさア」

嬉しくもあつたけれど、相当口惜しくもあつたので、あたしはそのことを先ず訊ねた。

「昨夜は心配させたネ。でもどうしても来られなかつたのだ、エライことが起つてネ」

「エライことツて、若い女のひとと飯事をすることなの」

「そツそんな呑気のんきなことじゃないよ。僕は昨夜、警視庁に留められていたんだ。そして、いまから三十分ほど前に、釈放しゃくほうになつたばかりだよ」

「ああ、警視庁なの！」

あたしはハツと思つた。そんなに早く露見ろけんしたのかな。

「そうだ、災難に類する事件なんだがネ」と彼は急に興奮の色を浮べて云つた。「実はうちの銀行の金庫室から、真夜中に沢山の現金を奪つて逃げた奴があるんだ。そいつが判らない。その部屋にいる青山金之進あおやまさんのしんという番人が殺されちまつた。——そして不思議なことに、その部屋に入るべきあらゆる入口が、完全に閉じられているのだ。穴といえ、その室へやにある送風機の入口と、壁の欄間らんまにある空気窓だけだ。空気窓の方は、嵌めこんだ鉄の棒がなかなかとれないから大丈夫。もう一つの送風機の穴は、蓋があつて、これが外はずせないことはないが、なにしろ二十センチそこそこの円形まるがたで、外は同じ位の大きさの鉄管で続いている。二十センチほどの直径のことだから、どんなに油汗あぶらあせを流してみても、身体が通りやしない。それなのに犯人の入つた証拠は、歴然れきぜんとしているのだ。こんな奇妙なことがあるだろうか」

「現金は沢山盗まれたの？」

「うん、三万円ばかりさ。——こんな可笑おかしいことはないといふので、記事は禁止で、われわれ行員が全部疑われていたんだ。僕もお蔭で禁きん足そくを喰くらったばかりか、とうとう一泊させられてしまった。ひどい目に遭あつたよ」

松永は、ポケットの中から、一本の煙草を出して、うまそうに吸った。

「変な事件ネ」

「全く変だ。探偵でなくとも、あの現場の光景は考えさせられるよ。入口のない部屋で、白昼のうちに巨額の金が盗まれたり、人が殺されたりしている」

「その番人は、どんな風に殺されているんでしょ」

「胸から腹にかけて、長く続いた細かいメスの跡がある、それが変な風に灼やけている。一見古疵ふるきずのようだが、古疵ではない」

「まあ、——どうしたんでしょうネ」

「ところが解剖の結果、もつとエライことが判つたんだよ。駭おどろくべきことは、その奇妙な古疵よりも、むしろその疵の下にあった。というわけは、腹を裂いてみると、駭おどろくじやあないか、あの番人の肺臓もなければ、心臓も胃袋も腸も無い。臓器という臓器が、すっかり紛失していたのだ。そんな意外なことが又とあるだろうか」

「まあ、——」とあたしは云つたものの、変な感じがした。あたしはそこで当然思い出すべきものを思い出して、ゾツとしたのだ。

「しかし、その奇妙な臓器紛失が、検束けんそくされていた僕たち社員を救つてくれることになつた、僕たちが手を下したものでないことが、その奇妙な犯罪から、逆に証明されたのだ」
「というところ……」

「つまり、人間の這入るべき入口の無い金庫室に忍びこんだ奴が、三万円を奪つた揚句あげく、番人の臓器まで盗んで行つたに違いないということになつたのさ。無論、どつちを先にやつたのかは知らないが……」

「思い切つた結論じゃないの。そんなこと、有り得るかしら」

「なんとかかいう名探偵が、その結論を出したのだ。捜査課の連中も、それを取つた。もつと尤も結論が出たつて、事件は急には解けまいと思うけれどネ。ああ併しかし、恐ろしいことをやる人間が有るものだ」

「もう止しましょう、そんな話は……。あんたがあたしのところへ帰つて来てくれれば、外に云うことはないわ。……縁起直えんぎなおしに、いま古い葡萄酒でも持つてくるわ」

あたしたちは、それから口あたりのいい洋酒の盃を重ねていった。お酒の力が、一切の

暗い気持を追^{おい}払^{はら}つてくれた。全く有難いと思った。——そしてまだ宵^{よい}のうちだったけれど、あたしたちはカーテンを下ろして、寝ることにした。

その夜は、すっかり熟睡した。松永が帰つて来た安心と、連日の疲労とが、お酒の力で和^{やわ}かに溶け合い、あたしを泥のように熟睡させたのだった。……

——翌朝、気のついたときは、もうすっかり明け放たれていた。よく睡つたものだ。あたしは全身的に、元気を恢復した。

「オヤ、——」

隣に並んで寝ていたと思つた松永の姿が、ベッドの上にも、それから室内にも見えない。庭でも散歩しているのじやないかと思つて、暫く待つていたけれど、一向彼の蹠^{あしおと}音はしなかつた。

「もう出掛けたのかしら……」今日は休むといつていたのに、と思ひながら卓^{テーブル}子の上を見ると、そこに見慣れない四角い封筒が載つてゐるのを発見した。あたしはハツと胸を衝^つかれたように感じた。

しかし手をのばして、その置き手紙を開くまでは、それほどまで大きい驚愕が隠されてゐるとは気がつかなかつた。ああ、あの置き手紙！ それは松永の筆蹟に違ひなかつたけ

れど、その走り書きのペンの跡は地震計の針のように震え、やっと次のような文面を判読することが出来たほどだった。

「愛する魚子よ、——

僕は神に見捨てられてしまった。かけがえのない大きな幸福を、棒に振ってしまわなければならなくなった。魚子よ、僕はもう再び君の前に、姿を現わすことが出来なくなった。ああ、その訳は……？

魚子よ、君は用心しなければいけない。あの銀行の金庫を襲った不思議の犯人は、世にも恐ろしい奴だ。彼奴の真の目標は、ひよつとすると、此の僕にあつたのではないかと考える。僕は……僕は今や真実を書き残して、愛する君に伝える。——僕は夜のうちに、あの隆々たる鼻と、キリリと引締つていた唇と（自分のものを褒めることを囁わらないで呉れ、これが本当に褒め納めなのだから）——僕はその鼻と唇とを失ってしまった。夜中に不図眼が醒めて、なんとなく変な気持なので、起き出したところ、僕は君の化粧台の鏡の中に、世にも醜い男の姿を発見したのだ！ これ以上は、書くことを許して呉れ。

そして最後に一言祈る。君の身体の上に、僕の遭つたような危害の加えざらんことを。

「松永哲夫」

この手紙を読み終つて、あたしは悲歎ひたんに暮れた。なんとという非道ひどいことをする悪漢だろう。銀行の金を盗み、番人を殺した上に、松永の美しい顔面を惨むごたらしく破壊して逃げるとは！

一体、そんなことをする悪漢は、何なに奴やつだろうか。手紙の中には、犯人は松永を目標とする者だと思つと、書いてあつた。松永は何をしたというのだ？

「ああ、やつぱりあれだろうか？　そうかも知れない。……イヤイヤ、そんなことは無い。夫はもう、死んでいるのだ。そんなことが出来よう筈がない」

そのときあたしは、不図床ふとゆかの上に、異様な物体を発見した。ベッドから滑り下りて、その傍へよつて、よくよく見た。それは茶褐色の灰の固まりかただつた。灰の固まり——それは確かに見覚えのあるものだつた。夫がいつも愛用した独逸製ドイツせいの半練り煙草の吸す殻がらに違ちがひなかつた。

そんな吸い殻が、昨日も一昨日も掃除をしたこの部屋に、残つてるといふのが可笑おかしかつた。誰か、昨夜ゆうべのうちに、ここへ入つて来て、煙草を吸い、その吸い殻を床の上に落としていったと考えるより外に途がなかつた。そして松永が、そんな種類の煙草を吸わぬことは、きわめて明あきかなことだつた。

「すると、若しや死んだ筈の夫が……」

あたしは急に目の前が暗くなつたのを感じた。ああ、そんな恐ろしいことがあるだろうか。井戸の中へ突き墜とし、大きな石塊を頭の上へ落としてやったのに……。

そのとき、入口の扉についている真鍮製のハンドルが、独りでクルクルと廻りだした。ガチャリと鍵の音がした。

(誰だろう?) もうあたしは、立っているに堪えられなかった。——扉は、静かに開く。

だんだん開いて、やがて其の向うから、人の姿が現れた。それは紛れもなく夫の姿だった。たしかに此の手で殺した筈の、あの夫の姿だった。幽霊だろうか、それとも本物だろうか。

あたしの喉から、自然に叫び声が飛び出した。——夫の姿は、無言の儘、静かにこつちへ進んでくる。よく見ると、右手には愛蔵の古ぼけたパイプを持ち、左手には手術器械の入った大きな鞆をぶら下げて……。あたしは、極度の恐怖に襲われた。ああ彼は、一体何をしようというのだろうか?

夫は卓子の上へドサリと鞆を置いた。ピーンと錠をあけると、鞆が崩れて、ピカピカする手術器械が現れた。

「なツなにをするのです?」

「……」

夫はよく光る大きなメスを取り上げた。そしてジリジリと、あたしの身体に迫ってくるのだった。メスの尖端せんたんが、鼻の先に伸びてきた。

「アレーツ。誰か来て下さアい！」

「イツヒツヒツヒツ」

と、夫は始めて声を出した。気持がよくてたまらないという笑いだった。

「呀あツ。——」

白いものが、夫の手から飛んで来て、あたしの鼻孔びこうを塞ふさいだ。——きつい香りかおだ。と、その儘まま、あたしは気が遠くなつた。

その次、気がついてみると、あたしはベッドのある居間とは違って、真暗まっくらな場所に、なんだか蓆むしろのような上に寝かされていた。背中が痛い。裸に引き剥かれているらしい。起きあがろうと思つて、身体を動かしかけて、身体の変な調子にハツとした。

「あツ、腕が利かない！」

どうしたのかと思つてよく見ると、これは利かないのも道理、あたしの左右の腕は、肩

の下からブツブツリ切断されていた。腕なし女！

「ふツふツふツふツ」片隅から、厭いやな忍しのび笑わらいが聞えてきた。

「どうだ、身体の具合は？」

あッ、夫の声だ。ああ、それで解った。さっき気が遠くなってから、この両腕が夫の手で切断されてしまったのだ。憎んでも憎み足りない其の復讐ふくしゅう心しん！

「起きたらしいが、一つ立たせてやろうか」夫はそういうなり、あたしの腋わきの下に、冷い両手を入れた。持ち上げられたが、腰から下がイヤに軽い。フワリと立つことが出来たが、それは胴だけの高さだった。大腿部だいたいぶから下が切断されている！

「な、なんとという惨むごたらしいことをする悪魔！ どこもかも、切つちまっ……」

「切つちまっても、痛味いたみは感じないようにしてあげてあるよ」

「痛みが無くても、腕も脚も切ってしまったのネ。ひどいひと！ 悪魔！ 畜生！」

「切つたところもあるが、殖ふえているところもあるぜ。ひッひッひッ」

殖ふえたところ？ 夫の不思議な言葉に、あたしはまた身慄みぞるいをした。あたしをどうするつもりだろう。

「いま見せてやる。ホラ、この鏡で、お前の顔をよく見ろ！」

パツと懐中電灯が、顔の正面から、照りつけた。そしてその前に差し出された鏡の中。
 ——あたしは、その中に、見るべからざるものを見てしまった。

「イヤ、イヤ、イヤ、よして下さい。鏡を向うへやって……」

「ふツふツふツ。気に入つたと見えるネ。顔の真中に殖えたもう一つの鼻は、そりやあの男のだよ。それから、鎧戸よろいどのようになった二重の唇は、それもあの男のだよ。みんなお前の好きなものばかりだ。お礼を云ってもらいたいものだナ、ひツひツひツ」

「どうして殺さないんです。殺された方がましだ。……サア殺して！」

「待て待て。そうムザムザ殺すわけにはゆかないよ。さア、もつと横に寝ているのだ。いま流動食を飲ませてやるぞ。これからは、三度三度、おれが手をとって食事をさせてやる」

「誰が飲むもんですか」

「飲まなきや、滋養浣腸じようかんちようをしよう。注射でもいいが」

「ひと思いに殺して下さい」

「どうして、どうして。おれはこれから、お前を教育しなければならぬのだ。さア、横になつたところで、一つの楽しみを教えてやろう。そこに一つの穴のぞが明いている。それから下を覗いてみるがいい」

覗き穴——と聞いて、あたしは頭で、それを急いで探した。ああ、有った、有った。腕時計ほどの穴だ。身体を芋虫のようにくねらせて、その穴に眼をつけた。下には卓^{テーブル}子などが見える。夫の研究室なのだ。

「なにか見えるかい」

云われてあたしは小さい穴を、いろいろな角度から覗いてみた。

あつた、あつた。夫の見るというものが。椅子の一つに縛りつけられている化物のような顔を持った男の姿！ 着ているものを一見して、それと判る人の姿——ああ、なんと変わり果てた松永青年！ あたしの胸にはムラムラと反抗心が湧きあがった。

「あたしは、あなたの計画を遂げさせません。もうこの穴から、下を覗きませんよ。下を見ないでいれば、あなたの計画は半分以上、効果を失ってしまいます」

「はッはッはッ、莫^ば迦^かな女よ」と、夫は、暗がりの中で笑った。「おれの計画しているものはそんなことじゃない。見ようと見まいと、そのうちにハッキリ、お前はそれを感じることだろう！」

「では、あたしに何を感じさせようというのです」

「それは、妻というものの道だ、妻というものの運命だ！ よく考えて置けッ」

夫はそういうと、コトンコトンと蹙音をさせながら、この天井裏を出ていった。

それから天井裏の、奇妙な生活が始まった。あたしは、メリケン粉こぶくろ袋のような身体を同じところに横よこたえたまま、ただ夫がするのを待つより外なかった。三度三度の食事は、約束どおり夫が持つて来て、口の中に入れてくれた。あたしは、両手のないのを幸福と思うようになった。手がないばかりに、鼻が二つあり、おまけに唇が四枚もある醜怪な自分の顔を触らずに済んだ。

用を達すのにも困ると思つたが、それは医学にたけた夫が極めて始末のよいものと考え、て呉れたようだった。その代り、或る日、注射針を咽喉のあたりに刺さし透とおされたと思つたら、それつきり大きな声が出なくなつた。前とは似ても似つかぬ皺しわがれた声が、ほんの申し訳に、喉の奥から出るというに過ぎなかつた。なにをされても、俘囚ふしゅうの身には反抗すべき手段がなかつた。

鼻と唇とを殺そがれた松永は、それから後どうなつたか、氣のついたときには、例の天井の穴からは見えなくなつた。見えるのは、相変らず氣味の悪い屍体や、バラバラの手足や、壘漬びんづけになつた臓器の中に埋うづもれて、なにかしらせつせとメスを動かしている夫の仕事振

りだった。その仕事振りを、毎日朝から夜まで、あたしは天井裏から、眺めて暮した。

「なんて、熱心な研究家だろう！」

不図ふと、そんなことを思つてみて、後で慌てて取り消した。そろそろ夫の術中に入りかけた気が付いたからである。「妻の道、妻の運命」——と夫は云つたが、なにをあたしに知らしめようというのだろう。

しかし遂ついに、そのことがハッキリあたしに判る日がやつて来た。

それから十日も経つた或る日、もう暁の微光びこうが、窓からさしこんで来ようという夜明け頃だった。警官を交まじえた一隊の檢察係員が、風の如く、真下ましたの部屋に忍びこんで来た。あたしは、刑事たちが、盛んに家探やさがしをしているのを認めた。解剖室からすこし離れたところに、麻雀マジヤンたく卓たくをすこし高くしたようなものがあつて、その上に寒餅かんもちを漬つけるのに良さそうな壺つぼが載せてあつた。

「こんなものがある！」

「なんだろう。……オツ、明かないぞ」

捜査隊員はその壺を見つけて、グルリと取巻いた。床の上に下ろして、開けようとするが、見掛けによらず、蓋がきつく閉まつていて、なかなか開かない。

「そんな壺なんか、後廻しにし給え」と部長らしいのが云った。刑事たちは、その言葉を聞いて、また四方しほうに散った。壺は床の上に抛ほうり出されたままだった。

「どうも見つからん。これア犯人は逃げたのですぜ」

彼等はたしかにあたしたち夫婦を探しているものらしい。あたしは何とかして、此処ここにいることを知らせたかったが、重い鎖につながれた俘囚は天井裏の鼠ほどの音も出すことが出来なかつた。そのうちに一行は見る見るうちに室を出て行って、あとはヒツソリ閑かんとして機会は逃げてしまったのだ。

それにしても、夫は何処に行つたのだろう。

「オヤ、なんだろう？」あたしはそのとき、下の部屋に、なにか物の蠢うごめく気配を感じた。と、いきなりカタカタと、揺れゆれたものがあつた。

「あッ。壺だ！」

卓子テーブルの上から、床の上に下ろされた壺が、まるで中に生きものが入っているかのよう
に、さも焦じれたそうに揺れている。何か、入っているのだろうか。入っているとすると、猫か、小犬か、それとも椰子蟹やしがいでもあろうか。いよいよこの家は、化物屋敷になつたと思ひ、カタカタ揺り動く壺を、楽しく眺め暮した。なにしろ、それは近頃でない珍らしい

活動玩具かつどうおもちゃだつたから。その日も暮れて、また次の日になつた。壺は少し勢を減じたと
思われたが、それでも昨日と同じ様に、ときどきカタカタと滑稽こっけいな身振みぶりで揺らいだ。

夫はもう帰つて来そうなものと思われるのに、どうしたものか、なかなか姿を見せなかつた。あたしはお腹なかが空いて、たまらなくなつた。もう自分の身体のことにも気にならなくなつた。ただ一杯のスープに、あたしの焦燥しょうそうが集つた。

四日目、五日目。あたしはもう頭をあげる力もない。壺はもう全く動かない。そうして遂に七日目が来た。時間のことは判らないが、不図ふと下の部屋がカタカタする音に気がついて例の覗き穴のぞから見下ろすと、この前に来たように一隊の警官隊が集つていた。その中でこの前に見かけなかつたような一人のキビキビした背広の男が一同の前になにか云つていた。

「……博士は、絶対に、この部屋から出ていません。私はこの前に一緒に来ればよかつたと思ひます。多分もう手遅れになつたような気がします。あの××銀行の、入口の嚴重に閉つた金庫室へ忍びこんだのもたしかに博士だつたのです。そういうと變に思われるでしょうが、実は博士は僅か十五センチの直径の送風パイプの中から、あの部屋に侵入したのです」

「それア理窟に合わないよ、帆村君」と部長らしいのが横合から叫んだ。「あの大きな博士の身体が、あんな細いパイプの中に入るなどと考えるのは、滑稽すぎて言葉がない」

「ではいまその滑稽をお取消し願うために、博士の身体を皆さんの前にお目にかけてましよう」

「ナニ博士の在所が判っているのか。一体どこに居るのだ」

「この中ですよ」

帆村は腰を曲げて、足許の壺を指した。警官たちは、あまりの馬鹿馬鹿しさに、ドツと声をあげて笑った。

帆村は別に怒りもせず、壺に手をかけて、逆にしたり、蓋をいじったりしていたが、やがて、恭々しく壺に一礼をすると、手にしていた大きいハンマーで、ポカリと壺の胴中を叩き割った。中からは黄色い枕のようなものがゴロリと転り出た。

「これが我が国外科の最高権威、室戸博士の餓死屍体です！」

あまりのことに、人々は思わず顔を背けた。なんとという人体だ。顔は一方から殺いだようになり、肩には僅かに骨の一部が隆起し、胸は左半分だけ、腹は臍の上あたりで切れている。手も足も全く見えない。人形の壊れたものにも、こんななまで無惨な姿をしたもの

は無いだらう。

「みなさん。これは博士の論文にある人間の最小整理形体さいしょうせいりけいたいです。つまり二つある肺は一つにし、胃袋は取り去つて腸ちように接ぐという風に、極度の肉体整理を行ったものです。こうすれば、頭脳は普通の人間の二十倍もの働きをすることになるそうで、博士はその研究を自らの肉体に試しみられたのです」

人々は啞然あぜんとして、帆村の話に聞き入った。

「この壺は博士のベッドだったんです。その整理形体に最も適したベッドだったんです。ところで、こんな身体で、どうして博士は往來を闊歩かつぽされたか。いまその手足をこちらに入れましょう」

帆村は立つて、壺の載っていた卓子テーブルの上に行った。そして台の中央部をしきりに探していたが、やがて指をもつて上からグツと押した。するとギーツという物音がすると思うと、卓子の中からニヨキリと二本の腕と二本の脚が飛び出した。それは空間に、博士の両腕と両脚とを形づくつてみせた。

「ごらんなさい。あの壺の蓋が明いて、博士の身体がバネ仕掛しかけけで、この辺の高さまで飛び出して来たとなると、電磁石の働きで、この人造手足がピタリと嵌はまめるのです。しかしこ

の動作は、博士が壺の底に明いている穴から、卓子テーブルの上の隠し釦ボタンを押さねばなりません。押さなければ、この壺の蓋も明きません。博士が餓死をされたのは、睡っているうちにこの壺が卓子テーブルの上から下ろされた結果です」

一座は苦しそうに揺いだ。

「しかし博士は、何かの原因で精神が錯乱せられた。そしてあの兇行きようこうを演じたのです。小さいパイプの中を抜けることは、その手足を一時バラバラに外し、一旦向う側へ抜けた上、また元のように組立てれば、苦もなく出来ることです。それを考えないと、あの金庫の部屋に忍び込んだことが信ぜられない。これで私の説が滑稽でないことがお判りでしょう」

やがて帆村は一同を促うながして退場をすすめた。

「あの夫人はどうしたろう？」

と部長が、あたしのことを思い出した。

「魚子夫人はアルプスの山さんちゆう中に締め殺してあると博士の日記に出ています。さあ、これからアルプスへ急ぐのです」

人々はゾロゾロと室を出ていった。

「待つて！」

あたしは力一杯に叫んだ。しかしその声は彼等の耳に達しなかった。ああ、馬鹿、馬鹿！ 帆村探偵のお馬鹿さん！ ここにあたしが繋がれているのが判らないのかい。夫は、あの井戸の蓋の穴から逃げ出したのだ。呪いの大石塊は、彼に命中しなかったのだ。ああ今は、あたしには餓死だけが待つている。お馬鹿さんが引返して来る頃には、あたしはもう此の世のものじゃ無い。夫が死ねば、妻もまた自然に死ぬ！ 夫の放言が今死に臨んで、始めて合点がいった。夫はいつか、こんなことの起るのを予期していたのか知れない。あたしもここで、潔く死を祝福しましょう！

青空文庫情報

底本：「海野十三全集第2巻・俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年2月号

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月10日公開

2011年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

俘囚

海野十三

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>